

令和4年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢北陵高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
1 本校のスローガンである「時を守り、場を清め、礼を正す」を全生徒が意識し、自ら実践できるようにねばり強く働きかける。	① 時間厳守の指導を徹底し、遅刻・欠席者数の減少と皆出席を奨励する。また、登校指導等により挨拶の励行を推進する。	生徒指導 学年 各教科	【成果指標】 （生徒） 皆出席者数の増加に努める。	学年あたり1年間の皆出席者数が A 80人以上であった B 60人以上～80人未満であった C 40人以上～60人未満であった D 40人未満であった	皆出席者数 1年 63名 2年 48名 3年 43名 平均 51名 C	中間評価時と比べ半減している。冬場、体調不良を訴える生徒が激増したことが要因と思われる。健康管理(感染症対策含)の指導が必要であり、今後とも生徒の状況把握に努め、保護者と連携しながら、遅刻・欠席者数を減らす取り組みを継続する。
			【努力指標】 （生徒）（保護者）（教員） 生徒自ら進んで挨拶ができる。	自ら進んでの挨拶が A よくできている B だいたいできている C あまりできていない D ほとんどできていない	A+B合計 生徒 85.6% 保護者 89.9% 教員 64.2%	A+Bの合計が生徒85.6%、保護者89.9%、教員64.2%と、生徒や保護者と教職員の意識の隔たりが縮まっている。日頃から生徒に挨拶の大切さを指導し、元気に挨拶をしている生徒も多くなってきた。今後も教職員も含め挨拶の励行に取り組みたい。
	② 服装容儀の指導を徹底し、生徒の規律・マナーの向上を目指す。	生徒指導 学年	【満足度指標】 （生徒）（保護者）（教員） 様々な機会を捉え、服装・頭髪に関して注意を促し、自発的な規律・マナーの遵守に努める。	北陵生は頭髪・服装容儀やマナーなどについて A よく守っている B だいたい守っている C あまり守っていない D ほとんど守っていない	A+Bの合計 生徒 94.5% 保護者 86.4% 教員 36.7%	A+Bの合計が生徒94.5%、保護者86.4%、教員36.7%と、生徒や保護者と教職員の意識の隔たりが縮まっている。挨拶と同様、就職等の進路を見据えて学年団と生徒指導課、さらに進路指導課との連携が成果につながった。今後も教職員の共通理解を図り、保護者にも理解を求めながら指導を行う。
			【努力指標】（教員） 生徒理解を心がけ、生徒の不注意な行動の未然防止のための早期指導に努めている。	生徒理解に心がけ、不注意な行動の未然防止に努めている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない	A+Bの合計 92.8%	担任や保健相談課など、生徒に直接かかわる教職員だけでなく、それ以外の教職員も日頃から本校生徒の様子について、アンテナを高くして見ていくことが必要である。今後も管理職、学年主任、保健相談、生徒指導による情報交換会を継続し、教職員の共通理解や連携を強めて、生徒理解に努めたい。
③ 生徒を注意深く見守り、面接や保護者との連絡をより密にし、生徒理解を深める。	生徒指導 学年	【努力目標】（教員） いじめ等の早期発見、早期対応に努め、教員間での情報共有がなされている。	いじめ等の早期発見、早期対応に努め、教員間での情報共有がなされている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない	A+Bの合計 97.6%	A+Bの合計が97.6%という結果であった。今後もいじめに関し、情報交換会、学年会などを通じてさらに情報共有を行い、いじめや問題行動の防止に努め、予兆等問題点がないかどうか目を配り、内容が複雑化する前に、保護者との連絡・連携をより密にしていく。	
		保健相談 学年	【努力目標】（教員） いじめ等の早期発見、早期対応に努め、教員間での情報共有がなされている。	いじめ等の早期発見、早期対応に努め、教員間での情報共有がなされている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない	A+Bの合計 97.6%	A+Bの合計が97.6%という結果であった。今後もいじめに関し、情報交換会、学年会などを通じてさらに情報共有を行い、いじめや問題行動の防止に努め、予兆等問題点がないかどうか目を配り、内容が複雑化する前に、保護者との連絡・連携をより密にしていく。
学校関係者評価委員会の評価		成人年齢の引き下げにより、18歳高校3年生が成人として扱われている。学校の服装や頭髪指導が成人に達している生徒に行うことの難しさを感じる。また、LGBT問題にも関わっている場合がある。今後はさらに、生徒指導と進路指導を絡めて行ってほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		校則の見直しを前提に、教職員、生徒のみならず学校評議員会・学校関係者評価委員会やPTAの方にも入っていただき、より時代に沿った、そして本校の生徒に合ったものに改定できるよう連携しながら作り上げていく。				

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
2 ICTを活用した授業改善を進め、基礎学力の定着とわかる喜びや学ぶ意義を実感できるように努める。	① ICTを活用した研究授業や公開授業を積極的に行い、授業改善に努める。	教務 各教科	【努力指標】（教員） ICT機器の効果的な活用や工夫に努め、研究・公開授業・授業参観などを実施する。	ICT機器の効果的な活用に努めている教員の割合が A 80%以上である B 70%以上～80%未満である C 60%以上～70%未満である D 60%未満である	A+Bの合計 81%	A+Bの合計が81%であった。昨年度同期の72%から9ポイント数値が上がり、過去5年の間では最高であった。ICT機器を効果的に活用した教授法が浸透してきていることがうかがえる。さらに効果的な活用を目指して授業の改善・検討を進めていきたい。
	② わかる授業を行うとともに、生徒の興味・関心を引き出す授業の工夫・改善に努める。	教務 各教科	【努力指標】（教員） 互見授業を実施し、生徒が意欲的に学習に取り組めるよう授業改善に努める。	生徒の発言や活動を増やす授業の工夫に A 積極的に取り組んだ B ある程度満足できる取り組みができた C 積極的な取り組みはできなかった D ほとんど取り組めなかった	A+Bの合計 95.3%	A+Bの合計が95.3%、昨年度中間より（79%）より16ポイント数値が上がった。昨年度と比べてコロナ禍での授業方法が多様化し、生徒の発言の場をより多く実現できる状況や環境が整ってきたことが挙げられる。さらに求められる学力観の育成につながるよう工夫を進めていく。
	③ 家庭での学習習慣の定着を図る。	教務 進路指導 学年 各教科	【成果指標】（生徒） 自主的な学習を継続的に取り組むことができた。	家庭での平均学習時間が A 90分以上である B 70分以上～90分未満である C 55分以上～70分未満である D 55分未満である	A+Bの合計 65.1%	全体平均値としてはA54.5%、B10.7%の計65.1%となり、昨年度よりも7.9ポイント減少した。原因は、毎日の家庭学習が何のための学習なのか、何につながるのか目的や目標が明確でない生徒が多いのではと考える。課題を提供し、それをこなすだけの学習ではなく進路実現につなげるための学習であるという目的を補習等でより明確化し、家庭学習時間を増やすことが必要である。
学校関係者評価委員会の評価	小・中学校では、学校をしばらく欠席しているが、体調に問題がない場合（新型コロナウイルス感染症に感染し自宅療養中又は濃厚接触者で自宅待機中）オンライン授業や課題などが配信されている。高校でもそのような配慮や学習指導を行っていただきたい。					
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	欠席などによる学習の補償については、Google Classroomなどでの連絡や教材の配信はすでに行っている。今後、家庭のwi-fi環境の有無によって学習の補償に差が出ることをないように、課題の郵送や保護者に手渡しするなど工夫していきたい。					

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
3 自分を知り、社会を知り、将来の自分を考えることのできる生徒の育成に向け、キャリア教育の一層の推進を図る。	① 各学年に応じた進路学習を工夫し、主体的で継続的な学びができるように支援する。	進路指導 教務 学年	【努力指標】（教員） 生徒が自らの適性を理解し、進路目標をより明確に定めることができるよう、少しでも多くの個人面談を行う。	担任と生徒との1年間の個人面談回数が A 6回以上 B 5回以上 C 4回以上 D 4回未満	個人面談回数 5回以上 B判定	個人面談回数は概ね5回以上行われているが、回数はもちろんのこと、その質が求められる。学年団等と連携しながら、生徒理解と進路目標をより明確に定めることができるよう面談を継続して行う。
			【満足度指標】（生徒） 進路指導の行事や「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」の学習が進路を考える上で A 大いに役立った B ある程度役立った C あまり役立たなかった D まったく役立たなかった	進路指導の行事や「産業社会と人間」・「総合的な探究の時間」の学習が進路を考える上で A 大いに役立った B ある程度役立った C あまり役立たなかった D まったく役立たなかった	A+Bの合計 92.2%	A+Bが92.2%であり、一定の成果が得られたと考える。1年次生は「産業社会と人間」で実施した社会人講話や卒業生との懇談及びガイダンスで、2年次生は「総合的な探究の時間」で実施したインターンシップ等の校外実習ならびに報告会において、自身の進路について意識し考えることができた。
			【成果指標】（生徒） 進学志望の生徒が第一志望校に合格することをより重視する。就職については、早期に内定率100%となるよう指導する。	四年制大志望者のうち第1志望校に合格した生徒が A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満 学校推薦による就職希望者について、 A 10月末で100%内定を達成 B 11月末で100%内定を達成 C 12月末で100%内定を達成 D 12月末で100%内定に達していない	四年制大学希望者のうち第1志望校に合格した生徒の割合 92% A判定 学校推薦による就職希望者11月末100%内定 B判定	四年制大学希望者のうち第1志望校に合格した生徒の割合は92%であった。（1月11日現在）自己推薦で不合格となり再度、同校を学校推薦で受験し合格した生徒もいた。最初の不合格の理由は志望動機、面接の評価が悪かったため、学校推薦ではしっかり対策を行い臨んだ。また、学校推薦による就職希望者は11月末で100%内定を達成することができた。生徒の進路実現には進学就職関係なく面接や小論文で自分の思いや考えを相手にきちんと伝える力を高めることが重要である。
② 各種資格・検定試験に取り組む機会を設け挑戦する意欲を喚起する。	各教科 学年 進路指導	【成果指標】（生徒） 各種資格・検定試験に多くの生徒が挑戦し、取得・合格数を増やす。	新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数が A 900人以上であった B 850人以上～900人未満であった C 800人以上～850人未満であった D 800人未満であった	新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数 （1月末） 497人 D判定	今年度は公募推薦での資格の加点を活用して受験する生徒が減少したり、コロナ禍における濃厚接触者や陽性者判明したために未受験となり、のべ人数は減少した。しかし、数多くの工業資格・検定を取得した生徒に贈られるジュニアマイスターゴールド認定者は4名、さらに特別表彰者は4名と努力が実を結んだ。今後とも各種資格・検定試験に取り組む機会を捉え、挑戦する意欲を喚起する。	
③ 保護者や関係機関と連携を深め、進路指導の充実を図る。	進路指導 学年	【満足度指標】（保護者） 進路について、必要な情報が提供されている。	提供された情報に対して A 満足できた B ある程度満足できた C あまり満足できなかった D 満足できなかった	A+Bの合計 91.1%	A+Bの合計は91.1%。進路決定に至るまでの学校生活の過ごし方を生徒や保護者に理解してもらうため、進路からGoogle Classroomでの回覧や資料配布といった情報を発信した。（例 資格取得の意義、部活動やボランティア活動、補習に参加する意義など）今後も学年や教科と連絡を密にし、生徒の進路実現を目指したい。また、保護者のための進路説明会の開催も企画していく。	
学校関係者評価委員会の評価	学校が生徒に対して強く働きかけ、サポートしたことについては、高い判定結果となっている。逆に生徒が自発的に行う資格や検定取得に向けたものについては判定結果が悪い。一概には言えないが、生徒のやる気を引き出すような関わりがもっと必要ではないかと考える。学校内で開催する検定や資格だけでなく、外部で実施されるものについても情報をもらいたい。					
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	資格や検定取得が生徒自身の進路選択に大きく関わることを、LHのみならず、「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」、進路ガイダンスなどでも資料を提示しながら呼び掛けていく。また、保護者に対しても懇談会や進路説明会を通じてお知らせしたい。					

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
4 学校の活性化のため、部活動や地域ボランティアの活性化を図るとともに、学校の魅力を発信する取組を充実させる。	① 部活動の活性化を目指し支援・運営する。	特活 全職員	【成果指標】（生徒） 部活動への加入率を高め、充実した高校生活になるよう支援する。	部活動への加入率が A 90%以上である B 85%以上～90%未満である C 80%以上～85%未満である D 80%未満である	部活動加入率 78.8% D判定	中間評価時より1.7ポイント低下し、最終加入率は78.8%となった。新型コロナ禍での活動制限、部活動内の人間関係、本人の活動意欲の低下や目的意識の薄弱が原因と考えられる。その状況は続いているが、学校行事の復活等もあり生徒の活気が戻りつつある。今後活性化させるために、部活動の魅力のアピールや部活動間の連帯感を持たせる。
			【満足度指標】（生徒） 生徒が部活動に主体的に取り組み切磋琢磨することを通して、豊かな人間関係を築き、達成感を得る。	部活動に対し満足感・達成感を感じている生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上～80%未満である C 60%以上～70%未満である D 60%未満である	部活動に対し満足感・達成感を感じている生徒前期 75.7% 後期78.6% B判定	前期は75.7%。後期は78.6%ですべての学年において前期より満足感・達成感が高くなっている。令和4年度は、総体総文・新人大会・北信越大会・全国大会など、ほとんどの大会に参加することができた。長引くコロナ禍ではあるが、感染対策をしながら活発に活動を継続し、生徒の満足感や達成感を向上させる。
	② 地域行事・学校行事等に参加し、地域との連携を密にする。	特活	【成果指標】（生徒） 地域の清掃活動や行事、ボランティア等に参加する。（「北陵アバンテ」を含める）	休日も含めて年1回以上参加した生徒が A 400人以上であった B 300人以上～400人未満であった C 200人以上～300人未満であった D 200人未満であった	ボランティア活動に参加した生徒のべ 人数 605人 A判定	令和4年度の結果は、地域ボランティア（東原町）のべ30名、サマーボランティア8名、森本駅前広場でのボランティア8名、金沢マラソン54名、MRラジオ「もりラジ」に3名参加した。秋の「北陵アバンテ」では、全校生徒510名が森本地区中心にゴミ収集や通学路清掃、草刈りを行うなど、地域との関わりを大切にしながらボランティア活動に参加することができた。次年度も継続していきたい。
			【満足度指標】（保護者） 保護者が本校の教育活動全般を理解し、満足している。	本校の教育活動を理解し満足している保護者が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	本校の教育活動を理解し満足していると答えた保護者 90.3% A判定	後期の結果は90.3%であり、A判定となった。授業や部活動、行事などの活動を理解し満足している保護者が多いということである。来年度も今年度の取り組み同様に、本校の教育活動を充実させ、さらに満足度が高まるよう努力する。
	③ 信頼される学校づくりに努める。	総務 学年 生徒指導 保健相談	【満足度指標】（保護者） 保護者が本校の教育活動全般を理解し、満足している。	本校の教育活動を理解し満足している保護者が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	本校の教育活動を理解し満足していると答えた保護者 90.3% A判定	後期の結果は90.3%であり、A判定となった。授業や部活動、行事などの活動を理解し満足している保護者が多いということである。来年度も今年度の取り組み同様に、本校の教育活動を充実させ、さらに満足度が高まるよう努力する。
			【成果指標】（教員） 本校の特色や生徒の活動が、ホームページなどで積極的に発信されている。	発信しているとする教員の割合が A 95%以上 B 85%以上95%未満 C 75%以上85%未満 D 75%未満	情報を発信していると答えた教員 96% A判定	前後期の結果はA判定。H30年度以降96%以上の値である。情報発信の効果と意義が教員全体に意識されている現れといえる。今後も積極的な学校生活、部活動などの情報を発信していく。
学校関係者評価委員会の評価		生徒が満足度・達成感を感じられるような教育活動を今後もお願いしたい。生徒が森本駅前広場での様々なイベントに参加し、森本地区の地域活性化に貢献していることは、とても良い取り組みであった。これらは、学校の情報を発信ができる場でもあり、今後とも続けてほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		生徒が満足感や達成感を持てるような教育活動の充実、地域ボランティアの活性化を図るとともに本校の情報発信に繋がる取組を行う。森本地区のいろんな課題を挙げて、森本地区の地域活性化に繋がっていかれたらと考えている。今後は教職員の働き方改革も含めて、保護者や地域の方にどうやって連携を深めていけるかを検討していく。				

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
5 働き方改革における教員の意識改革と行動改革を進めるとともに、業務のスクラップ&ビルドと平準化に取り組む。	① 月間や週間目標を設定し、それぞれが計画的に業務を進める。	全職員	【成果指標】（教員） 勤務時間調査における月別の時間外平均が、前年度同月を下回っている。	時間外平均が、前年度同期より、 A 前年度より減少している B 前年度と同等または増加している	B R 4年度 4～1月平均 38.6時間 R 3年度 4～1月平均 35.0時間	本年度は対外行事が多く、本校が主管校開催であったためこのような結果になったと思われる。ICTをより効果的に活用し会議時間の削減や会議自体を減らす取り組みを行ったが、さらに定時退校できるよう勤務時間を意識した業務遂行とスクラップ&ビルドを含めた改善を早急に進める。
学校関係者評価委員会の評価		数字だけで判断するのではなく、教職員の仕事に対する充実度からも働き方改革をすすめてほしい。また、土日祝日や勤務時間外で何か助けられることがあれば、同窓会・PTAからの協力も呼び掛けてはどうかと思う。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		どのような場面で同窓会やPTAと協力していけるかその事案を検討する。また、特定の教職員の勤務時間が長くなることがみられるので、充実感も考え合わせながら、時間外勤務時間の平均数値だけでは見えない勤務状況の把握に努め、業務のスクラップ&ビルドと平準化を進める。				